

オオクロバエ (*Calliphora nigribarbis*)



青藍色の大型のクロバエで、沖縄を除く、ほぼ日本全国で普通に見られる。成虫は春と秋に多く、夏場には姿が見られなくなる。幼虫は動物死体(含む魚類やその中間加工品)や厨芥類を食して発育する。年1化で、新成虫は春に出現する。

飛翔力が強く、嗅覚がすぐれているため、肉類を放置しておくとき寄ってくるので注意が必要である。成虫からはトリインフルエンザウイルスが検出されたことがある。ヒトの生活環境内でよく見られるが、家屋侵入性はそれほど強くない。近似の種にケブカクロバエがおり、分布や生態もほとんど同じである。

クロキンバエ(*Phormia regina*)



くすんだ青緑色の中型のクロバエ。北方系の種類で、北海道や東北地方が多い。発生は前種同様、動物死体や厨芥類からで、ゴミ処分場などで見られることが多い。飛翔力はそれほど強くない。家屋侵入性も強くはないが、生

肉や魚には誘引される。今回の東北地方津波被災地では、冷凍貯蔵施設から流出した魚類やすり身から大量の個体が発生し、6月中下旬にマスゴミで盛んにハエ問題としてとりあげられた種である。ルリキンバエにやや類似するが、中胸気門が橙色であることで区別可能である。

ヒロズキンバエ (*Lucilia sericata*)



緑色の光沢ある中型のクロバエ。早春から晩秋まで出現し、日本中に分布する。ヒトの生活環境に適応しており、ゴミ処分場や都市の公園などで普通に見られる。動物死体や糞などに集まる。本種はしばしば入院患者の傷口や潰瘍部分に卵を産み落とし、

偶発的ハエ幼虫症を引き起こす事が報告されている。また、有用昆虫としての一面も持っており、釣り餌のサシには本種の幼虫が利用されている。また、皮膚の壊死や潰瘍の治療法であるマゴットセラピーにも無菌で育てられた本種の幼虫が用いられている。ヒツジキンバエと酷似するが、個体数は本種の方がはるかに多い。

イエバエ (*Musca domestica*)



世界中に分布し、最もヒト親和性の高いハエで、家屋侵入性もきわめて強い。成虫は1年中見られ、ある程度の温度が保たれている場所では真冬でも活動している。鶏舎・牛舎・ゴミ処分場などから発生し、しばしば大量発生を起こし問題となる。

古くから各種病原微生物を機械的に媒介することが知られており、日本でも病原性大腸菌O-157等を媒介することが報告されている。殺虫剤抵抗性を獲得した個体も多い。